

教 育 研 究 業 績 書		
令和5年5月1日		
氏名 沼口 知恵子 印		
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学	小児看護学、災害看護、考える力の教育	
教 育 上 の 能 力 に 関 する 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) 実習要項の執筆	平成16年7月	『慢性・終末期期看護実習』の小児看護学実習部分の実習要項の執筆を担当。 特に実習記録用紙の見直しを行い、これまで使用していたアセスメント用紙の枠組みを見直し、作成した。チェックリスト方式ではなく、記述方式の記録用紙を作成した。看護計画にはエビデンス記載欄を設け重視した。
2) 演習内容の工夫	平成20年1月	『小児と家族の理解と看護』『子どものヘルスアセスメント』では、子どものアセスメントに必要な知識の教授と、実際のアセスメント技術の演習を実施。 特に小児看護において特有の「胸腹部のアセスメント」「鼠径部のアセスメント」の演習を組み、全員がDVDで視覚的な学習をしたのち、小グループに分かれて、モデル人形と小児用ベッドを用いてスキルの獲得のための演習を実施できるようにした。
3) 演習事例の作成	平成23年4月	『小児看護学演習』の「NICUにおける看護」について、演習事例を作成し（生後1日目での脊髄髄膜瘤の術後の場面設定）、学生が親役と看護師役となり、初の面会場面をロールプレイするもの。この演習から、NICUに入院する家族の心理、看護師の対応の原則を学習できるようにした。
4) 看護過程のための事例作成と学生の学生支援の工夫	平成23年4月	『小児看護学演習』の「事例に対する看護過程の展開」について、後期の実習を想定した看護過程の展開の実際を学習するために、実習で出会う可能性の高い4つの事例（脳性麻痺、喘息発作、鼠径ヘルニア、急性リンパ性白血病）を作成した。 各事例とも2つのシナリオとそれに関連した小課題を設定し、課題を学習することでシナリオの内容を理解しながら看護を考えることができるよう、設問を構成した。学生はグループで1事例を担当し、アセスメントと看護ケア計画を作成。計画発表の時間に他の事例の看護についても共有できる時間を設けた。学生のグループワーク支援として、週2日半日ずつ質問に答える時間を設け、グループ個別の質問に対応しながら、看護計画の立案を支援した。この際、ケアを検討する際には、そのエビデンスを明確にすることを常に意識するよう強調した。

5) 学習効果の向上を目指した実習内容・方法の工夫	平成25年10月	<p>『小児看護学実習』の科目責任者として、2週間の実習で病棟と外来における実習をすべての学生が経験できるように実習を組んだ。</p> <p>学生は3か所の施設に分かれて実習し、それぞれ急性期、慢性期、リハ期における小児看護を学べるようにした。また、外来実習での学びはグループで共有する時間を設け、学習目標に沿って体験を学習につなぐよう支援できる体制をとった。</p> <p>最終日は、別な施設で実習した学生が一堂に会し、グループが設定したテーマに沿って実習をプレゼンし、ディスカッションできるようにした。この学内カンファレンスには、臨床指導者にも可能な限り入っていただき、教育の成果を実感し、さらなる臨床実習指導の質向上につながるよう、工夫した。</p>
6) 科目へのシミュレーション教育の導入	平成27年4月	<p>『小児看護学Ⅱ』の演習において、4つのシナリオを開発した。</p> <p>育児に不安のある母親への発達スクリーニングの実施、②発熱による外来受診の際の間診、③検査を受ける子どもへのプレパレーション、④周手術期（帰室時）の看護</p> <p>上記4つのシナリオには、事前学習を効果的に進めるために各シナリオに対する看護援助を考える際に学習の必要な看護技術（輸液管理、採血時の固定、体重測定など）のスキルチェックシートを作成した。これらを用いて学生は、演習当日までに技術の手順を練習し、さらに上記シナリオ内の患者や家族への声かけなどの一連の援助を計画書に書く。</p> <p>演習当日は、事前学習に関するミニテストを毎回実施。その後、各自が作成してきたシナリオに対する援助計画を小グループでディスカッションをし、エビデンスに基づいたベストな援助計画を検討。ディスカッション後は、いくつかの小グループにロールプレイを実施してもらい、学生の観察に基づき、ディブリーフィングをしながら、最善の援助計画を完成させていく。</p> <p>ロールプレイには、シミュレーターやSP（母親役）を用いて、臨床場面に近い状況を再現した。</p>
7) 看護実践をするための考える力の教育	平成30年	<p>看護実践に必要な考える力について、定義を行い、また考える力を育てる教育方法を抽出した。考える力を高めることに関連する科目を規定し、その科目におけるクリティカルシンキングの基礎情報、大学2年時の科目より導入した。シナリオを提示し、そこからの学生の気づきと拡散的な情報収集を促す教育方法を提示した。</p> <p>グループワークを中心に進め、またディベートも取り入れることで、学修のためのスキルだけではなく素直で率直な態度をも身に付けられるよう、科目を構成した。</p>
2 作成した教科書、教材 1) ロールプレイのためのモデル人形の設定、消耗品の作成	平成23年4月	<p>『小児看護学演習』の「NICUにおける看護」のロールプレイ実施のために、脊髄髄膜瘤の術後である生後1日目の男児の状態を、モデル人形を用いて再現する教材を作成し、演習に用いた。また、同科目内で、早産児への保育器でのケアに関する演習で使用する早産児用の紙おむつを作成し（サイズが小さいため既製品では合わず）、早産児のおむつ交換の演習に使用した。</p>

<p>2) シミュレーションルームの作成</p> <p>3) シミュレーションのためのシナリオ作成</p> <p>4) シミュレーションのためのシナリオ作成</p> <p>5) レールダール社主催の シミュレーション・ユーザー・ネットワーク (SUN)に参加</p>	<p>平成26年3月</p> <p>平成27年4月</p> <p>平成28年4月</p> <p>平成30年9月</p>	<p>シミュレーション教育を実施するにあたり、看護実習室内にシミュレーションルームを作成。NICUブースに目隠しをし、ビデオカメラを設置した。シミュレーションルームでのロールプレイをリアルタイムにシミュレーションルーム外にいる学生に見せることができ、録画した映像を用いてディブリーフィングができるようになった。</p> <p>3年生用の演習シナリオ開発：発育相談時の看護、外来検査時の看護、術後の看護</p> <p>3年生用演習シナリオ開発：外来受診時の問診、発達スクリーニングの実施</p> <p>今後の日本の人口動態の変化などから考えられる保健医療上の課題とそれに対応する保健医療分野の専門職の教育に関する課題を共有し、そのための様々な教育方法について、意見交換を行った。特に医療安全教育における新たな考え方やそれに対する教育方法について、またシミュレーターを用いた授業設計に関するディスカッションに参加し、今後の看護基礎教育への示唆を得た。</p>
<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価</p> <p>1) 平成27年度教員評価</p>	<p>平成28年3月</p>	<p>教育に関する総合評価B、研究に関する総合評価A、臨床活動に関する総合評価B、社会貢献に関する総合評価B、管理・運営業務に関する総合評価B 学科長評価；全体的に精力的に健闘している。</p>
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項 特になし</p>		
<p>5 その他</p> <p>1) 看護職のフィジカルアセスメント実践に関する研修参加</p> <p>2) 他大学のAdvanced OSCE見学</p> <p>3) SP活用に関する研修参加</p>	<p>平成16年8月</p> <p>平成17年6月</p> <p>平成17年8月</p>	<p>ライフプランニングセンター主催の国際フォーラム「ナースによるフィジカルアセスメントの実践（2004）」に参加し、看護職によるフィジカルアセスメントの重要性を学び、学部生へのヘルスアセスメントに関する講義演習における教育に役立っている。また、OSCEの課題作成を通して、学生のフィジカルアセスメント能力の向上に役立っている。</p> <p>特色GP学外研修：筑波大学Advanced OSCE見学；医学専門学群6年次生へのOSCE(兼・筑波大学附属病院レジデント採用試験)を見学し、5ステーションを通して診断をつけていく、課題設定のあり方や、Simulated Patientの効果などを学んだ。本学での看護学生へのAdvanced OSCEへの利用可能性を検討する機会となった。</p> <p>ライフプランニングセンター主催の国際フォーラム「臨床能力を高めるための模擬患者の活用（2005）」に参加し、模擬患者の養成と活用、模擬患者も参加しての課題作成の実際もワークショップにて経験した。模擬患者の利用については、難易度の高い小児領域における模擬患者導入の方法、問題点を理解し、本学でのSP導入の検討材料となった。</p>

4) 茨城県立医療大学海外派遣研修 (USF, UCSF)	平成26年2月	<p>本学の海外派遣研修として、米国サンフランシスコ大学 (USF) 、カリフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF) へ視察研修に行った。USFにおいては、学部教育におけるシミュレーション教育の実際を見学し、シミュレーションセンタースタッフ、教員と意見交換を行った。UCSFにおいては、小児領域のNPの学生の授業に参加し、NP教育の実際と米国のNP教育制度に関する説明・意見交換を行った。さらにNPコースの学生との意見交換において、米国におけるEvidene based Nursingの授業展開について聞き取りをした。</p>
5) 千葉大学看護学教育ワークショップ参加	平成27年10月	<p>千葉大学大学院等の主催による看護学教育ワークショップに参加し、10年後の看護学教育を取り巻く環境について全国の大学から参加した看護教員とディスカッションを行い、10年後の教育に関するプラント自校でのFD活動の計画についてプレゼンテーションを実施した。10年後の人口動態を踏まえて、特に看護学実習においてどのように質を保証するかについて、ペンシルバニア大学の教授の講義を基に、日本各地での状況について情報共有でき、今後の看護教育とFDあり方について意見をまとめることができた。</p>
6) 看護学科FDの企画・運営	平成28年2-3月	<p>上記ワークショップ参加後、研修で検討したFD計画を基に、看護学科FDを企画。IPUミーティング『臨地実習での教育の質保証を考える』というテーマで、2月22日に第1回「学習効果の上がりやすい実習記録を考えよう」(参加者22名)、3月8日に第2回「学生の力を引きだす指導を考えよう」(参加者19名)の2回シリーズのFDを実施した。</p>
7) 小児看護OSCEに関する交流集会に参加	平成28年8月	<p>看護学教育学会の交流集会「小児看護OSCE」に参加。札幌市立大学の小児看護学担当教員による自校のOSCEの取り組みのプレゼントディスカッションに参加し、小児OSCEの評価や教育効果の提示の仕方について情報共有を行った。今後も札幌市立大学小児看護領域と小児看護OSCEに関する様々な情報共有を行うこととなった。</p>

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	
1 資格, 免許		
1) 看護師免許	平成11年4月	第1028212号
2) 保健師免許	平成11年4月	第89255号
3) 助産師免許	平成11年4月	第106867号
2 特許等 特になし		

<p>3 実務の経験を有する者についての特記事項</p> <p>1) 茨城県立医療大学付属病院での看護相談</p> <p>2) クリニックにおける育児相談・発達相談</p> <p>3) 茨城県立医療大学付属病院での小児領域における看護相談ニーズ調査</p> <p>4) 茨城県立下妻特別支援学校学校公開 教育講演会「障がいのある子どもが災害に備える力を高める支援」</p> <p>5) 「自然災害に備えて 子どもの力をたかめるために～子ども自身が身を守る力を高めるかかわりとは～」開催</p>	<p>平成25年4月～</p> <p>平成25年4月～</p> <p>平成26年5月</p> <p>平成30年11月</p> <p>平成31年3月</p>	<p>1か月から2か月に1回、外来における看護相談業務に従事。</p> <p>2か月に1回、小児クリニックにおける育児相談を担当。育児に関して、また子どもの発達に関する相談を受け、発達スクリーニング検査とそれに基づくアドバイスを実施。</p> <p>小児病棟、小児外来を利用する子どもの母親に対し、看護師への相談ニーズを探るため、アンケート調査を実施。結果に基づき、病棟や外来での勉強会やイベントの企画を実施した。</p> <p>特別支援学校においてこれまで取り組んできた、障がいのある子どもを災害から守り、また子どもの力を高めるための取り組みについて、事例を交えて紹介し、学校の内外での災害に備えた取り組みの重要性と効果について講演。</p> <p>これまで開発してきた教育ツールを紹介し、その効果について説明した。新たな教育ツールとして開発したICT教材を紹介し、様々な障がいのある子どもへの介入例について紹介し、パネルディスカッションを行った。 パネルディスカッションの座長を担当した。</p>
<p>4 その他</p> <p>競争的研究資金獲得状況</p>	<p>平成19年～平成20年</p> <p>平成23年～平成25年</p> <p>平成25年～平成27年</p> <p>平成26年～平成29年</p> <p>平成27年～平成29年</p> <p>平成27年～平成31年</p>	<p>日本学術振興会 研究費補助金 基盤研究 (C) 課題番号17592322 Child Abuse防止のためのアクションリサーチ-看護職者に求められる新たな戦略 分担研究者 (研究代表 上田礼子)</p> <p>日本学術振興会 研究費助成金 基盤研究 (C) 課題番号23593328 肢体不自由児が災害の備えへのセルフケア能力を高めるためのパッケージの開発 連携研究者 (研究代表 加藤令子)</p> <p>日本学術振興会 研究費助成金 挑戦的萌芽研究 課題番号25670961 在宅重症心身障害児の家族エンパワメントに焦点を当てた家族ケア実践モデルの開発 分担研究者 (研究代表 涌水理恵)</p> <p>日本学術振興会 研究費補助金 基盤研究 (A) 課題番号26253098 オレムのセルフケア理論を基盤とした「こどもセルフケア看護理論」の構築 連携研究者 (研究代表 片田範子)</p> <p>日本学術振興会 学術研究費助成金 挑戦的萌芽研究 課題番号15K15846 在宅重症心身障害児の家族エンパワメントに焦点を当てたケアモデルの検証 分担研究者 (研究代表 涌水理恵)</p> <p>日本学術振興会 研究費助成金 基盤研究 (B) 課題番号15H05088 障がいのある子どもが自然災害に備えセルフケア能力を高めるための支援構築 連携研究者 (研究代表 加藤令子)</p>

平成28年～令和元年	日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C) 課題番号16K12153 医療を必要とする子どもの災害に備える力を高めるための支援ツール開発 研究代表者
平成30年～令和3年	日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C) 課題番号18K10642 保健師による5歳児健康診断実施の条件-ヘルスアセスメントの活用- 分担研究者 (代表 山口忍)
令和5年～令和8年	日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C) 課題番号 23K10187 慢性疾患のある子どもが災害に備える力を高めるための看護支援ツールの実装化 研究代表者

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 看護学大辞典 (第6版)	共著	平成25年1月	メヂカルフレンド社 看護学大辞典 (第6版) P145, 693, 784, 960, 185	「WeeFIM」「向社会的行動」「子どもの身体理解」「死の概念発達」「病気の概念発達」について定義、意味を解説した。 文章の執筆校正を担当。 監修: 永井良三, 田村やよひ
2. フォレンジック看護 性暴力被害者支援の基本から実践まで	共著	平成28年8月	医歯薬出版 フォレンジック看護 P87-90	性暴力被害者支援の基礎知識から実践的な支援方法を対象別にまとめた日本初の性暴力対策に関するテキスト。 「第2編基礎知識 3. 特別な配慮が必要な対象者」執筆を担当。 監修: 加納尚美, 李節子, 家吉望み
3. 新体系 看護学全書 別冊ヘルスプロモーション	共著	平成30年11月	メヂカルフレンド社 (P138-142, 162-178)	ヘルスプロモーションについて、その考え方、関連する理論と活用、ライフスター時毎のヘルスプロモーションについて網羅した教科書シリーズの別冊。 「第3章生活習慣におけるヘルスプロモーション III活動・休息」及び「第4章各ライフステージにおけるヘルスプロモーション I章小児のヘルスプロモーション」を執筆。 監修: 市村久美子, 島内憲夫
4. こどもセルフケア理論	共著	令和元年9月	医学書院 (P39-46)	オレムのセルフケア理論をこどもに適用し、こどもにおけるセルフケア理論の考え方と実際をまとめたもの。 「第2章子どものセルフケア B. 子どものセルフケアにおける基本的条件付け要因」を執筆 編集: 片田範子
(学術論文) 1. 産褥1ヶ月における母乳影響確立のための諸要因の検討 (査読付)	共著	平成14年12月	茨城県母性衛生学会誌 22号P32-35	母乳栄養の確立に影響する要因を探るために、妊娠後期、出産後、産後1ヶ月に質問紙調査を実施した。妊娠中の知識、母乳意欲、授乳回数、サポート状況などの要因を調べたがいずれも有意な影響は示さなかった。研究方法の検討、アンケート用紙作成、データ収集、分析を担当。 共著者: 川澄祐子, 秋山佳織, 森(沼口)知恵子 以下1名

2. 重症心身障害児とその家族に対する情報提供のあり方（査読付）	共著	平成17年3月	茨城県立医療大学紀要第10巻P27-36	重症心身障害児の家族の情報に関する経験から、情報提供時に考慮されるべき要素を特定するために、面接調査を実施した。結果、子育て、社会資源、医学的知識、説明の仕方の工夫、前提となる信頼関係、情報の信頼性という7つの考慮すべきテーマが抽出された。共著者のスーパーバイズを受けながら、全プロセスを主に担当。 共著者：沼口知恵子、前田和子、永濱明子
3. 自閉症児・者の受療環境に関する家族のニーズ（査読付）	共著	平成17年11月	小児保健研究(64)6 P802-810	I県における自閉症児・者302名の家族の受療のニーズ分析を実施した。結果、64%が医療について困っており、一般医療職には、「障害特性を理解していない不適切な対応」があることが明らかとなった。以上から一般医療職への自閉症の障害特性を理解したサービスの検討、医療職への基礎教育、継続教育の充実の必要性が示唆された。データ分析、解釈を担当。 共著者：小室佳文、前田和子、長崎多恵子、沼口知恵子
4. 乳幼児の睡眠研究に関する看護者の課題（査読付）	共著	平成18年9月	日本小児看護学会誌15(2) P112-118	国内の乳幼児の睡眠に関する研究動向を探るために、文献検討を行った。結果研究内容は、病児と健常児を対象としたものがほぼ同数であり、実態調査や親の悩み調査が主であり、具体的な支援にはつながっていない現状にあった。文献収集と文献内容の整理、論文推敲を担当。 共著者：田村麻里子、加藤令子、小室佳文、沼口知恵子
5. 児童虐待に関する看護基礎教育—教科書内容の検討—（査読付）	共著	平成20年3月	茨城県立医療大学紀要第13巻 P91-105	看護基礎教育用の小児看護、母性看護、家族看護、地域看護、助産学の国内教科書の内容分析をし、児童虐待に関する看護基礎教育で教授すべき内容を明らかにした。結果、児童虐待の歴史や法律、定義、影響だけでなくアセスメントの定義と方法など虐待予防に関してより具体的な記載の必要性が明らかとなった。共著者の助言を受けながら全プロセスを担当。 共著者：沼口知恵子、前田和子
6. 全領域の教員参加によるOSCE実施の評価—看護系大学生の認識から見たOSCEの意義—（査読付）	共著	平成21年3月	茨城県立医療大学紀要第14巻 P1-10	OSCEの教育効果とその課題について明らかにするために、平成17年度～20年度の間に、3、4年次共にOSCEを受けた学生に対し質模試調査を実施。結果、約半数の生徒が緊張のため、技能が十分に発揮できず、OSCEに合格した学生の6割が自分の技術力がないと感じていた。今後は、学生が客観的に自己の技術評価ができるためのかわりの必要性が示唆された。データ分析、作表を担当。 共著者：高橋由紀、浅川和美、沼口知恵子 以下4名
7. 茨城県における幼児の睡眠調査—睡眠の実態—（査読付）	共著	平成21年7月	日本小児保健研究68(4) P470-475	子どもの睡眠に関する実態把握のために、茨城県内の幼児の保護者870人にアンケート調査を実施。結果、25%以上の幼児遅寝であり、子どもの睡眠時間に影響する要因として、午睡、きょうだいの存在、母親の子どもの睡眠に対する認識が影響していた。母親への子どもの睡眠の認識を高める支援、健診等での援助の重要性が示唆された。アンケート項目の作成、データ分析、論文執筆を担当。 共著者：沼口知恵子、加藤令子、小室佳文、田村麻里子

8. OSCEにおける教員間の評価の差異と課題（査読付）	共著	平成23年3月	茨城県立医療大学紀要第16巻P1-11	茨城県立医療大学看護学科で実施しているOSCEの過去5年間の教員評価について、教員間の差異を課題別に分析し、特定の課題において教員間の評価に統計学的有意差が認められた。評価の評価に統計学的有意差が認められた。評価の客観性を高めるために、評価項目の行動レベルでの表記とSPによる評価の導入の重要性が示唆された。データ分析、論文推敲を担当。共著者：近藤智恵、市村久美子、伊藤香世子、高橋由紀、沼口知恵子、黒田暢子
9. 子どもを対象とする医療施設に勤務する看護師の災害への備え（査読付）	共著	平成23年12月	茨城県立病院医学雑誌28(2) P19-25	茨城県内にある子どもを対象とする医療施設に勤務する看護師への災害の備えを促すために導入したケアパッケージの効果を分析した。ケアパッケージ導入後は、看護師の災害の備えに対する意識と行動に関する認識が高まり、小児看護経験年数にかかわらず、災害への備えが促されたことが示唆された。データ収集、分析、論文執筆を担当。共著者：沼口知恵子、加藤令子、小室佳文
10. 医療的ケア対象児が在籍する学校の自然災害の備え—教員の災害への認識と学校の災害への備えの実態—（査読付）	共著	平成24年5月	日本災害看護学会誌13(3) P15-25	医療的ケアを必要とする子どもを担当する特別支援学校と小学校教員の災害への認識と学校での備えの現状を明らかにした。教員は、災害への備えの必要性は認識しているが、学校では備えが進んでおらず、今後は学校の状況を考慮しながらの具体的な備えの検討を行うことが課題として提示された。データ収集、分析、論文推敲を担当。共著者：加藤令子、小室佳文、沼口知恵子
11. 小児・成人混合病棟における災害への備えの効果—東北地方太平洋沖地震当日の看護師の経験から—（査読付）	共著	平成25年3月	茨城県立医療大学紀要18 P61-70	A県内の小児・成人混合病棟において2008年より導入を促していた『小児病棟用ケアパッケージ』（兵庫県立大開発）を用いた災害への備えの効果を東北太平洋沖地震当日の看護師の経験から明らかにした。データ収集、分析、論文執筆を担当。共著者：沼口知恵子、小室佳文、加藤令子
12. 看護学科カリキュラム改定作業について（査読付）	共著	平成25年3月	茨城県立医療大学紀要18 P81-87	平成25年度看護学科カリキュラム改訂作業に関する1年間のプロセスについて、報告した。論文推敲を担当。共著者：加納尚美、松田たみ子、市村久美子、北川公子、山口 忍、小室佳文、渡邊尚子、高橋由紀、川波公香、長岡由紀子、綾部明江、中村摩紀、高村祐子、沼口知恵子ほか3名。
13. Teacher-perceived emergency disaster needs of physically and mentally challenged school children in Japan.（肢体不自由および軽度知的障がいがある子どもの災害への備えに関する特別支援学校教員の認識）（査読付）	共著	平成26年3月	Health Emergency and Disaster Nursing 1 P33-44	特別支援学校の教員(肢体不自由と軽度知的障がい担当)の災害時におけるニーズについて、インタビュー調査の結果を報告した。データ収集、分析、論文推敲を担当。共著者：R. Kato, S. Nishida, K. Komuro, C. Numaguchi

14. 在宅で重症心身障がい児を養育する家族の生活実態に関する文献検討（査読付）	共著	平成26年5月	小児保健研究73(4) P599-607	在宅で障がい児を療育する家族の生活実態について、文献検討を実施した。家族が直面する問題として、「養育者の披露」「きょうだいの心理的問題」等5つが挙げられた。 論文推敲を担当。 共著者：藤岡寛、涌水理恵、山口慶子、佐藤奈保、西垣佳織、沼口知恵子
15. 客観的咬合力に関連する身体的要因の実態調査（査読付）	共著	平成27年3月	茨城県立医療大学紀要20 P85-90	A町の特定健康診査に参加した40代から70代の18名に対し咬合力の測定を実施した。さらに身体的要因を測定した。客観的咬合力と身体的要因との相関は認められなかった。 論文推敲を担当。 共著者：本村美和、山口忍、佐藤斎、山川百合子、綾部明江、沼口知恵子ほか8名
16. ユニフィケーション活動における外来看護相談の取り組み（査読付）	共著	平成27年3月	茨城県立医療大学紀要20 P113-121	本学と付属病院看護部で行ってきたユニフィケーションについて、2013年度より看護相談を導入し、新たな連携の在り方を開拓してきた。1年間の活動経過を報告した。 データ収集、論文推敲を担当。 共著者：市村久美子、渡辺尚子、川波公香、黒田暢子、前田隆子、安川揚子、中村摩紀、荒木亜紀、吉良淳子、高村祐子、高橋由紀、川野道宏、大江佳織、加納尚美、島田智織、長岡由紀子、西出弘美、小野敏子、沼口知恵子ほか11名
17. 大学と阿見町との食育活動推進に向けた取り組み—地域貢献活動の一環として—（査読付）	共著	平成27年3月	茨城県立医療大学紀要20 P131-136	H25年度より3年計画で開始した食育を通じた地域貢献活動の仕組みづくりについて、1年目の実践から、阿見町の20代以上の住民の食行動や食生活の実態を把握することができた。 データ収集・分析、論文推敲を担当 共著者：山口忍、佐藤斎、山川百合子、綾部明江、沼口知恵子ほか7人
18. 肢体不自由のある中学部生徒の自然災害への備えに関する認識（査読付）	共著	平成27年11月	小児保健研究74(6) P863-870	肢体不自由のある特別支援学校中学部の生徒の自然災害への備えに関する認識を調査した。生徒たちは自分で備えることや幼児期後期から発達段階に合わせて備えることが必要であると認識していた。また大人に守られることから段階的に自立して備える必要があることを認識していた。 データ収集・分析、論文構成担当。 共著者：小室佳文、加藤令子、沼口知恵子、西田志穂
19. 重症心身障がい児と生活を共にする母親・父親・きょうだいの認識する自己役割、他の家族員への役割期待、家族としてのサポートニーズ（査読付）	共著	平成27年11月	インターナショナル Nursing Care Research 14(4) P1-10	在宅で生活する重症心身障害児と同居する父、母、きょうだいに面接調査を行い、それぞれが考える自己役割と他者への役割期待、家族としてのサポートニーズを明らかにした。データ収集・分析、論文執筆・推敲担当。 共著者：涌水理恵、藤岡寛、沼口知恵子ほか3名

20. 看護学科卒業生の大学院看護学専攻(博士前期課程)に関する意識調査	共著	平成29年3月	茨城県立医療大学紀要22 P23-30	<p>本学卒業生の大学院前期課程に関する理解及びニーズを把握するために、卒業生を対象にアンケート調査及びヒアリングを実施した。138名より回答を得、3割は大学院の存在や内容を認知しておらず、7割が受験は考えていないと回答した。魅力的な大学については、家庭・子育てとの両立、カリキュラムや教員の充実、キャリアパスの提示などが示された。論文推敲を担当。</p> <p>加納尚美, 市村久美子, 松田たみ子, 山口忍, 吉良淳子, 小野敏子, 島田智織, 中村博文, 富田美加, 沼口知恵子, 前田隆子, 本村美和</p>
21. 大学院博士前期課程看護学専攻のカリキュラム改定に向けたビジョン作成ワークショップ	共著	平成29年3月	茨城県立医療大学紀要22 P89-93	<p>大学院博士前期課程のカリキュラム改正に向けて、看護学科教員が参加し、どのようなビジョンを持つべきかを話し合うワークショップを実施し、その実践報告をした。ワークショップの成果として、グループごとに10年後の大学院に期待するビジョンを作成し、それらの内容分析をし、大学院の新たなビジョンの案として、検討した。データ分析、文章校正を担当。</p> <p>富田美加, 加納尚美, 沼口知恵子, 前田隆子, 本村美和</p>
22. 海外視察で学んだ大学院での高度実践看護学教育ートロント大学・イリノイ州立大学の実際からー	共著	平成29年3月	茨城県立医療大学紀要22 P81-87	<p>高度実践看護教育の実際を知るために、トロント大学及びイリノイ州立大学の看護学教育の実際を見学し、また教員からの聞き取りを行った。米国では、高度実践看護の教育としては、NPの教育がほとんどであり、その教育は修士課程から博士課程に移行していた。さらにNP養成カリキュラムの詳細を各分野ごとに聞き取りし、本学での今後の大学院教育を検討するための示唆を得た。文章校正を担当。</p> <p>山口忍, 前田隆子, 沼口知恵子, 加納尚美</p>
23. 災害時に備えるー「医療的ケア」を受ける子供たちへのケア	共著	平成30年	コミュニティケア19 (13) P110-117	<p>筆者らが開発してきた特別支援学校等で災害に備えて活用できるツールの必要性和その概要を紹介し、これまでの介入研究の結果をもとに、効果と課題について説明した。さらに現在進行中の研究についても触れ、看護師がどのように医療的ケアを受ける子どもたちの災害に備えるかを解説した。文章校正を担当。</p> <p>共著者：加藤令子、小室佳文、沼口知恵子 加藤令子、小室佳文、沼口知恵子</p>
24. 重症心身障害児と共に生活するきょうだいの想い	共著	令和3年	日本重症心身障害学会46(3), 315-22.	<p>在宅にて生活する重症心身障害児の11名のきょうだいの、家族との生活の中で、重症児、自分自身、親に対して持っている想いを、面接調査から明らかにした。</p> <p>データ収集、データ分析、論文執筆を担当 沼口知恵子、西垣佳織、涌水理恵ほか2名</p>

<p>25. PBLを用いたシナリオ学修の効果—学生の面接調査の分析—</p> <p>(学位論文)</p> <p>1. 障害のある子どもと家族に対する情報提供のあり方 (修士学位論文)</p> <p>2. こども虐待に関する看護基礎教育—教科書内容の分析— (博士学位論文)</p>	<p>共著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>令和5年3月</p> <p>平成16年3月</p> <p>平成21年3月</p>	<p>常磐看護学研究雑誌 5, 35-44.</p> <p>茨城県立医療大学大学院</p> <p>沖縄県立看護大学院</p>	<p>かんごがくぶ2年生に実施しているPBLを用いたシナリオ学修の効果を明らかにする目的で、学生5名に面接調査を実施した。分析の結果、学生は、看護の展開について、視点を披露もって対象をとらえることや情報の整理などができるようになったと回答した。また、学修関連行動については、主体的に学ぶ、思考の言語化などが可能となったことが示され、PBLを用いたシナリオ学修は、看護を展開する力および学修関連行動のかくどくに効果があることが示された。</p> <p>データ分析、論文執筆を担当。 沼口知恵子、南雲史代、福田大祐</p> <p>重症心身障害児とダウン症候群の親への面接調査から、診断を受けてから現在までの情報提供に関する想いや希望を聞き取り、適切な在り方について考察した。</p> <p>看護基礎教育で用いられる日米の教科書を分析し、記述内容と量を比較し、今後我が国での子ども虐待に関する教育の在り方について考察した。</p>
<p>(その他)</p> <p>「総説等」</p> <p>1. 小児リハビリテーションにおける看護教育</p> <p>2. 特別支援学校における災害対策—『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ』の開発と活用効果—</p> <p>3. 『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ「茨城モデル」』を用いた災害への備え</p> <p>4. 米国およびコロラド州の医療を必要とする子どもの自然災害への備え</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成18年8月</p> <p>平成23年2月</p> <p>平成23年3月</p> <p>平成24年6月</p>	<p>小児看護29(8) P1141-1145</p> <p>小児看護34(2) P224-228</p> <p>平成22・23年度 茨城県立医療大学地域貢献研究報告書</p> <p>小児看護35(6) P780-785</p>	<p>本学でのリハビリテーションに関する教育内容の紹介。本学カリキュラムにおける(リ)ハビリテーションに関連する科目と内容の整理・作表を担当。 共著者：加藤令子、小室佳文、沼口知恵子</p> <p>自然災害から児童生徒の安全や命を守るため、『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ』を開発。本パッケージにより、教職員の災害の備えに関する意識の高まりと行動変容がみられた。図表作成と推敲を担当。 共著者：加藤令子、小室佳文、沼口知恵子</p> <p>平成20、21年に開発した『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ「茨城モデル」』の普及を図り、特別支援学校に通学する子どもたちのいのちと安全が守ら得ることを目的として実施した2年間の研究の報告である。本研究では、県内すべての特別支援学校へのパッケージ普及を行い、使用者へのインタビューより修正点の明確化と修正を実施し、『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ』を完成した。データ収集・分析、報告書執筆を担当。 共著者：小室佳文、沼口知恵子、加藤令子</p> <p>米国コロラド州デンバー市での自然災害への備えの現状と災害看護教育の中で特に小児に焦点を当てた教育内容に関する調査報告。文章校正を担当。 共著者：加藤令子、小室佳文、西田志穂、沼口知恵子</p>

5. 自然災害に備え子どもを守る 米国での取り組み Vol. 2	共著	平成24年7月	小児看護35(7) P909-913	米国コロラド州のChildren's Hospital Coloradoにおける災害への備えの現状についての調査報告。文章校正を担当。 共著者：西田志穂、加藤令子、小室佳文、 <u>沼口知恵子</u>
6. 自然災害に備え子どもを守る 米国での取り組み Vol. 3	共著	平成24年8月	小児看護35(8) P1260-1264	米国における災害対策システムについての調査報告。文章校正を担当。 共著者：西田志穂、加藤令子、小室佳文、 <u>沼口知恵子</u>
7. 自然災害に備え子どもを守る 米国での取り組み Vol. 4	共著	平成24年10月	小児看護35(9) P1402-1406	米国コロラド州コロラド大学における大学としての危機管理についての調査報告。文章校正を担当。 共著者：小室佳文、加藤令子、西田志穂、 <u>沼口知恵子</u>
8. 自然災害に備え子どもを守る 米国での取り組み Vol. 5	共著	平成24年11月	小児看護35(10) P1538-1542	米国コロラド州コロラド大学看護学部における災害教育の実際についての調査報告。文章校正を担当。 共著者：小室佳文、加藤令子、西田志穂、 <u>沼口知恵子</u>
9. 食育計画を活用した住民の生活習慣改善への試み	共著	平成28年3月	平成25～27年度 茨城県立医療大学地域貢献研究報告書	食育と健康を関連付けて考え、食育活動を促進することで住民の健康増進を促進することを目的としたプロジェクトである。 阿見町小学校での食育授業の実施、給食便りの執筆、住民への講演会、阿見町健康づくりプランの策定協力、小中学校での食生活調査、高齢者を対象とした食生活等調査等様々な活動を実践しながら阿見町住民への生活習慣改善を試みた。データ収集・分析、報告書執筆担当 共著者：山口忍、佐藤斉、山川百合子、綾部明江、 <u>沼口知恵子</u> ほか13名
10. 小児看護OSCEの実際とその評価 輸液管理：トラブルなし	単著	令和元年	小児看護42(9) P1114-1117	小児看護領域のOSCE課題について、トラブルのない輸液管理の課題と評価内容、OSCE実施の際の環境設定や評価について解説した。
11. 小児看護OSCEの実際とその評価 輸液管理：トラブルあり	単著	令和元年	小児看護42(9) P1118-1121	小児看護領域のOSCEについて、トラブルのある場合の輸液管理の課題と評価内容、OSCE実施の際の環境設定や評価について解説した。
12. 小児看護OSCEの実際とその評価 成長・発達のアセスメント	単著	令和元年	小児看護42(9) P1134-1137	小児看護領域のOSCEについて、成長発達のアセスメントに関する課題と評価内容、OSCE実施時の環境設定や評価について解説した。
13. 研究から見る小児領域における自然災害に備えるための活動の実際と課題	共著	令和元年	小児看護42(12) P1474-1479	先行研究の分析から、小児看護領域における自然災害に備えるための活動を抽出した。 データ収集、分析、文章推敲を担当。 西川菜央、加藤令子、 <u>沼口知恵子</u> ほか3名

14. 慢性疾患等の医療を必要とする子供が災害に備えるための看護支援ツールの開発	共著	令和元年	小児看護42(12) P1509-1512	慢性疾患の子ども自身が災害時に自分の体調の維持管理ができるよう備える力を高めるために、看護師が子どもたちを支援する際のガイドとなるツールを開発。慢性疾患を持つ子どもと家族、担当看護師への調査から、高めるべき力を抽出し、その力を高めるための支援を示した。 データ収集、分析、執筆を担当 沼口知恵子、加藤令子
15. 看護基礎教育における重症心身障がい児の看護	共著	令和3年	小児看護44(8) P918-923	看護基礎教育において、重症心身障がい児の看護を学修することについて、本学での取り組みを紹介し、その意義と課題を解説した。 データ分析、執筆担当 沼口知恵子、門間智子、南雲史代、野口愛、前田和子
「学会発表」				
1. 障害のある子どもと家族に対する情報提供のあり方	—	平成16年7月	日本小児看護学会第14回学術集会（宮崎）	ダウン症児、重症心身障害児の家族5例に対し、子どもに関する経験をインタビュー調査し、子どもとの生活にうまく対処できる情報提供のあり方について、情報内容と方法を報告した。 森（沼口）知恵子、ほか2名
2. 専門職とのミーティングに関する重症心身障害児の家族の意見	—	平成16年10月	第51回日本小児保健学会（盛岡）	茨城県内のリハビリテーション病院に通う重症心身障害児の家族を対象に、専門職とのミーティングのあり方についてインタビュー調査を実施し、家族が望むミーティングのあり方について報告した。 小室佳文、前田和子、野田智子、森（沼口）知恵子、ほか14名
3. 障害をもつ子どもと家族を看護する小児看護師の役割	—	平成17年7月	日本小児看護学会第15回学術集会（横浜）	A県内において、障害児施設に従事する看護師を対象に、障がい児看護師の役割に関する考えを質問紙調査し、因子分析の結果8因子を特定し報告した。 沼口知恵子、前田和子、長崎多恵子ほか8名
4. 医療職との連携に関する養護学校教員の意見	—	平成17年7月	日本小児看護学会第15回学術集会（横浜）	関東地方の養護学校教員4名を参加者とし、医療職との連携に関してフォーカスグループインタビューを言実施した。養護学校教員が考える連携の定義、意義、現状と期待について報告した。 小室佳文、前田和子、野田智子、森（沼口）知恵子、ほか14名
5. 障害児を看護する小児看護師の役割 一 家族の調査から一	—	平成17年11月	第70回日本民族衛生学会総会（東京）	茨城県内の病院・施設を利用する家族を対象に、障がい児を看護する看護師に期待される役割と能力に関する質問紙調査を実施し、先行研究で特定した8つの役割ごとに得点を算出し、家族の期待役割の順位を報告した。 前田和子、沼口知恵子、小室佳文
6. 障害児を看護する小児看護師の役割—看護師、他職種、家族間の比較—	—	平成18年7月	日本小児看護学会第16回学術集会（横浜）	茨城県内の病院・施設を利用する家族と施設に勤務する看護師、他職種を対象に、障がい児を看護する看護師に期待される役割と能力に関する質問紙調査を実施した。3者の期待について報告した。 前田和子、沼口知恵子、以下6名

7. 茨城県における乳幼児の睡眠に関する実態調査—第1報—	—	平成18年9月	第53回日本小児保健学会(甲府)	茨城県内の乳幼児の保護者を対象に、子どもの睡眠に関する質問紙調査を実施し、子どもの睡眠時間の実態と修士・起床のパターンについて報告した。 沼口知恵子、加藤令子、小室佳文、田村真理子
8. 茨城県における乳幼児の睡眠に関する実態調査—第2報—	—	平成18年9月	第53回日本小児保健学会(甲府)	茨城県内の乳幼児の保護者を対象に、子どもの睡眠に関する質問紙調査を実施し、子どもの睡眠に対する親の認識ニーズについて報告した。 沼口知恵子、以下3名
9. 国内外の看護教科書における虐待に関する記述内容の検討	—	平成19年7月	日本小児看護学会 第17回学術集会(長野)	看護基礎教育で使用される国内外の小児看護、母子看護、家族看護、地域保健、助産学の教科書を対象に、児童虐待に関する内容を比較検討し、日本の看護教育上の課題を告白した。 沼口知恵子、前田和子
10. 児童虐待防止に関する関係職種の教育的ニーズ—沖縄県離島の場合—	—	平成19年7月	第12回聖路加看護学会学術大会	沖縄県A島の看護師、保健師、保険福祉職、保育士等を対象に、児童虐待防止に関する教育的ニーズの明確化を目的に質問紙調査を実施。虐待防止に必要と考えられる能力と支援について報告した。 山城五月、前田和子、沼口知恵子
11. 茨城県の子どもの就寝時間と母親が子どもに希望する就寝時間の実態	—	平成19年9月	第54回日本小児保健学会(前橋)	茨城県内の乳幼児の保護者を対象に、子どもの睡眠に関する質問紙調査を実施し、月齢別の子どもと就寝時間と、母親が子どもに希望する就寝時間について報告した。 沼口知恵子、加藤令子、小室佳文
12. 茨城県内の子どもの睡眠に関する母親の困りごとの実態	—	平成19年9月	第54回日本小児保健学会(前橋)	茨城県内の乳幼児の保護者を対象に、子どもの睡眠に関する質問紙調査を実施し、母親の困りごとについて報告する。 田村麻里子、加藤令子、小室佳文、沼口知恵子
13. A県における乳幼児の睡眠に関する母親の考えと心掛け	—	平成20年7月	日本小児看護学会 第18回学術集会(名古屋)	A県内の乳幼児の母親を参加者として、子どもの睡眠に関する面接調査を実施し、子どもの睡眠に関する母親の考えと心掛けについて報告した。 沼口知恵子、加藤令子、小室佳文、田村麻里子
14. A県の乳幼児の睡眠に関する母親の困りごとと対処	—	平成20年7月	日本小児看護学会 第18回学術集会(名古屋)	A県内の乳幼児の母親を参加者として、子どもの睡眠時間に関する面接調査を実施し、子どもの睡眠に関する母親の困りごとと対処内容について報告した。 小室佳文、加藤令子、沼口知恵子、以下1名
15. Wake-Up Times and Bedtimes for Infants, Toddlers and Preschoolers in Ibaraki Prefecture (Poster Workshop Session) (茨城県の乳幼児の起床時間と就寝時間)	—	平成20年8月	11th World Congress of World Association for Infant Mental Health(Yokohama, Japan)	茨城県内の乳幼児の親に対する子どもの睡眠に関するアンケート調査から、乳幼児の起床就寝時間の実態について報告した。 Kato R, Numaguchi C, 以下2名

16. The Understanding of Mothers Regarding the Sleeping Habits of Infants, Toddlers and Preschoolers in Ibaraki Prefecture (Poster Workshop Session) (茨城県の乳幼児の母親の睡眠習慣に関する理解)	—	平成20年8月	11th World Congress of World Association for Infant Mental Health (Yokohama, Japan)	茨城県内の乳幼児の親に対する子どもの睡眠に関するアンケート調査から、子どもの睡眠に関する親の認識について報告した。 Komuro K, Reiko Kato, <u>Numaguchi C</u> , 以下1名
17. 子どもの就寝時間に影響を与える要因	—	平成20年9月	第55回日本小児保健学会 (札幌)	茨城県内の乳幼児の母親を参加者として、子どもの睡眠に関するアンケート調査から、乳幼児の気象就寝時間の実態について報告した。 <u>沼口知恵子</u> , 加藤令子, 小室佳文ほか2名
18. 医療施設に勤務する看護師の災害への備え	—	平成21年7月	日本小児看護学会第19回学術集会 (札幌)	A県内の医療機関の子どもを対象とする病棟・外来に勤務する看護師を参加者とし、『小児病棟用ケアパッケージ』を導入。その効果を質問紙調査し、報告した。 <u>沼口知恵子</u> , 加藤令子, 小室佳文, 田村麻里子, 錦織正子
19. 特別支援学校等における災害の備え—災害の備えに対する現状と教員に認識—	—	平成21年7月	日本小児看護学会第19回学術集会 (札幌)	A県内の特別支援学校と医療的ケア対象児が在籍する小学校1校の7人を参加者とし、学校での災害への備えの現状や必要性、医療的ケア時の準備状況、災害に備えるための必要体制、パッケージ開発の可能性に関してグループインタビューを実施し、備えの現状の教員の認識について報告した。 加藤令子, 小室佳文, 片田範子, <u>沼口知恵子</u> , 以下4名
20. 特別支援学校での災害の備えを促すためのアクションリサーチ	—	平成21年11月	第29回日本看護科学学会学術集会 (千葉)	A県内の特別支援学校に勤務する看護師を参加者とし、現在の災害への備えと災害への認識についてインタビュー調査を実施し、その結果を報告した。 加藤令子, 小室佳文, <u>沼口知恵子</u> , ほか5名。
21. 特別支援学校に勤務する看護職員の災害への備え	—	平成22年1月	第29回日本看護科学学会学術集会 (千葉)	A県内の特別支援学校に勤務する看護師を参加者とし、現在の災害への備えと災害への認識についてインタビュー調査を実施し、その結果を報告した。 加藤令子, 小室佳文, <u>沼口知恵子</u> , ほか5名。
22. Action research for promoting disaster preparedness in special schools (特別支援学校における災害への備え促進のためのアクションリサーチ)	—	平成22年1月	The 1st Research Conference of World Society of Disaster Nursing (Kobe, Japan)	A県内の特別支援学校6校の教員とA県の関連行政職を参加者とし、災害への備えの重要性について説明。参加者の意識の変化について報告した。 Reiko Kato, Kafumi Komuro, Noriko Katada, <u>Chieko Numaguchi</u> , Kazuyo Miyake
23. 特別支援学校等職員の災害の備え—「災害シミュレーションパッケージ」導入前アンケート調査より—	—	平成22年6月	日本小児看護学会第20回学術集会 (神戸)	A県内の特別支援学校の教員を参加者とし、発表者らが開発した「災害シミュレーションパッケージ」導入前の災害の備えについて質問紙調査を実施。自由記載を分析し、災害への備えの認識と現状について報告した。 加藤令子, 小室佳文, <u>沼口知恵子</u> , 片田範子, 三宅一代, 錦織正子

24. 医療的ケアが必要な子どもとその家族の在宅における災害への備えを促す支援の検討	—	平成22年10月	第69回日本公衆衛生学会総会（東京）	A県内の訪問看護ステーション看護師と医療的ケアが必要な子どもとその家族を参加者とし、「在宅用ケアパッケージを活用した災害への備えを促し、看護師と家族の変化について報告した。 錦織正子, 田村麻里子, 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子
25. 看護師の災害への備えの認識—『小児病棟用ケアパッケージ』導入前・後の分析から—	—	平成22年12月	第30回日本看護科学学会（札幌）	A県内の子どもを対象とする医療施設に勤務する看護師を参加者とし、「小児病棟用ケアパッケージ」導入前後の看護師の備えの認識を調査し報告した。 沼口知恵子, 加藤令子, 小室佳文, 錦織正子
26. 特別支援学校職員の災害への備えの認識と現状—「災害シミュレーションパッケージ」導入前・後の分析—	—	平成22年12月	第30回日本看護科学学会（札幌）	A県内の6特別支援学校の教職員を参加者とし、「災害シミュレーションパッケージ」の導入前後の効果について質問紙調査を実施し、結果を報告した。 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子, 片田範子, 三宅一代, 錦織正子
27. 「特別支援学校における災害への備えの認識尺度」原案の作成	—	平成23年7月	日本小児看護学会第21回学術集会（さいたま市）	自らが開発した『特別支援学校用シミュレーションパッケージ』の活用効果をはかるための認識尺度をパッケージ導入前用、導入後用を作成し、検討した。 小室佳文, 加藤令子, 沼口知恵子, 三宅一代, 片田範子
28. The effects of the use of “Disaster Simulation Package for Special needs Schools” during the Great East Earthquake Disaster (特別支援学校用災害シミュレーションパッケージの被害し日本大震災時の被害効果)	—	平成24年7月	The 9th International Conference with the Global Network of WHO Collaborating Centers for Nursing and Midwifery (Kobe, JAPAN)	自らが開発した『特別支援学校用シミュレーションパッケージ』を使用した特別支援学校の教員に対して東日本大震災時の行動を聞き取りし、効果を明らかにした。 Komuro K, Kato R, Numaguchi C
29. Teachers’ recognition of the self-care abilities of children with physical disabilities or mental and physical disabilities requiring improvement in preparation for disasters (肢体不自由と軽度知的障がいのある子どものセルフケア能力に対する教員の認識)	—	平成24年7月	The 9th International Conference with the Global Network of WHO Collaborating Centers for Nursing and Midwifery (Kobe, JAPAN)	肢体不自由と軽度の知的障害を持つ子どもの災害に備えるためのセルフケア能力について、特別支援学校の認識を明らかにした。 Kato R, Komuro K, Nishida S, Numaguchi C
30. 小児病棟用ケアパッケージを導入した医療施設における災害への備えの効果	—	平成24年7月	日本小児看護学会第22回学術集会（盛岡）	特別支援学校に通う肢体不自由児の母親を対象に、東日本大震災前後での児童の変化について聞き取り調査し、その影響について明らかにした。 西田志穂, 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子
31. 特別支援学校に通う肢体不自由児の東日本大震災前後の状況の実態 母親がとらえた子どもの様子から	—	平成24年7月	日本小児看護学会第22回学術集会（盛岡）	肢体不自由児を担当する特別支援学校の教員を対象に、東北地方太平洋沖地震発生日の学校での様子と教員の行動について聞き取り調査し、実態を明らかにした。 沼口知恵子, 加藤令子, 小室佳文, 西田志穂

32. 東北地方太平洋沖地震発生当日の特別支援学校の実態～肢体不自由児担当教員の経験から～	—	平成24年7月	日本災害看護学会第14回年次大会（名古屋）	肢体不自由児を担当する特別支援学校の教員を対象に、東北地方太平洋沖地震発生当日の学校での様子と教員の行動について聞き取り調査し、実態を明らかにした。 沼口知恵子、加藤令子、小室佳文、西田志穂
33. 小児・成人混合病棟における災害への備えの効果	—	平成24年7月	日本災害看護学会第14回年次大会（名古屋）	兵庫県立大学が開発した『小児病棟用ケアパッケージ』を使用していた小児・成人混合病棟において、東日本大震災発生時の備えの状況と看護師の対応について聞き取りし、備えの効果について明らかにした。 沼口知恵子、小室佳文、加藤令子
34. Effectiveness of using The Disaster Simulation Package for Special needs Schools（特別支援学校用災害シミュレーションパッケージの使用効果）	—	平成24年8月	World Society of Disaster Nursing Research Conference (Cardiff, UK)	『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ』を使用した特別支援学校の教員への聞き取り調査から、その効果と課題を明らかにした。 Kato R, Komuro K, <a href="#">Numaguchi C</a>
35. Teachers' Recognition for improving Children's Self-Care Ability for Disaster Preparedness（災害の備えに対する子どものセルフケア能力向上に対する教員の認識）	—	平成24年8月	World Society of Disaster Nursing Research Conference (Cardiff, UK)	特別支援学校の教員を対象に、災害の備えに対する子どもの能力の改善についての認識について聞き取りし、子ども自身の能力を高めることの必要性が明らかになった。 Kato R, Komuro K, Nishida S, <a href="#">Numaguchi C</a>
36. 災害前の備えの違いによる東日本大震災前後の特別支援学校の実態	—	平成24年9月	第59回日本小児保健協会学術集会（岡山）	関東圏内の特別支援学校において、東日本大震災前後で災害への備えがどのように変わったか、また震災発生時に学校ではどのような対応がとられたかを明らかにし、必要な備えについて明らかにした。 小室佳文、加藤令子、 <a href="#">沼口知恵子</a> 、西田志穂
37. 肢体不自由児自身が自然災害に備えることについての教員の認識—東日本大震災を経験した教員の分析—	—	平成24年11月	第59回日本小児保健協会学術集会（岡山）	特別支援学校の教員のうち、東日本大震災を経験した教員を対象に、肢体不自由児自身が災害に備えることについての認識を明らかにした。 加藤令子、西田志穂、小室佳文、 <a href="#">沼口知恵子</a>
38. 肢体不自由児が発達段階別に災害に備えることへの子ども自身の認識	—	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会（東京）	肢体不自由のある特別支援学校中学部の生徒を対象に、肢体不自由児自身が災害に備えることについて聞き取りした。生徒は、発達段階に応じて子ども自身も備えることの必要性を認識していた。 小室佳文、加藤令子、 <a href="#">沼口知恵子</a> 、西田志穂
39. 肢体不自由児が発達段階別に災害に備えるためのセルフケア能力を高める教育を行うことに関する保護者の認識	—	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会（東京）	肢体不自由のある児童生徒を育てる母親を対象に、肢体不自由のある子ども自身が災害に備えることについて聞き取りした。母親は、障がいの程度に応じた配慮は必要であるが、子ども自身が備えることの必要性を認識していた。 西田志穂、加藤令子、小室佳文、 <a href="#">沼口知恵子</a>

40. 肢体不自由児自身が自然災害に備えることにかかわる教員の認識—グループインタビューの分析—	—	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会（東京）	東日本大震災時に肢体不自由を対象とした特別支援学校に勤務していた教員に対しグループインタビューを2回実施し、肢体不自由児自身、保護者、教員の意識改革と、子どもの能力の獲得方法の検討が課題であることが見出された。 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子, 西田志穂
41. 障害児虐待に対する看護師の予防行動	—	平成24年12月	日本子ども虐待防止学会第18回学術集会 高知りょうま大会（高知）	障がい児看護に携わる看護師を対象に、虐待事例、虐待を疑う事例に遭遇したん場合に判断、行動について聞き取りした。看護師は決定的な情報を把握しながらも、虐待であることの判断には至っていなかった。個の判断ではなく、委員会等組織的検討ができる場を設け、的確な判断ができるよう環境を整える必要性が示唆された。 沼口知恵子, 小室佳文
42. 肢体不自由で重複障がいのある子ども自身が災害に備えることに関する教員の認識：自然災害発生の危険性が高い関東地区の特別支援学校。	—	平成25年6月	日本小児看護学会第23回学術集会（高知）	関東圏内の特別支援学校において、重複障害のある子ども自身が災害に備えることについて教員に聞き取りした。 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子, 西田志穂
43. 肢体不自由で重複障がいのある子ども自身が災害に備えることに関する保護者の認識：自然災害発生の危険性が高い関東地区の特別支援学校。	—	平成25年6月	日本小児看護学会第23回学術集会（高知）	関東圏内の特別支援学校に、重複障害の子どもを通学させている保護者に対して、子ども自身が災害に備えることについて聞き取りした。 西田志穂, 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子
44. 『災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-』開発への取り組み、：第1報-行政・学校管理者への働きかけから現状把握-	—	平成25年8月	日本災害看護学会第15回学術集会（札幌）	子ども自身が災害に備える力を高めるための『災害セルフケアパッケージ』の開発プロセスとして、行政、学校管理者の働きかけ、教員の現状把握について報告した。 加藤令子, 小室佳文, 西田志穂, 沼口知恵子
45. 『災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-』開発への取り組み、：第2報-パッケージ開発から介入-	—	平成25年8月	日本災害看護学会第15回学術集会（札幌）	子ども自身が災害に備える力を高めるための『災害セルフケアパッケージ』の開発プロセスとして、パッケージ内容の検討方法、特別支援学校での介入について報告した。加藤令子, 小室佳文, 西田志穂, 沼口知恵子
46. 『災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-』開発への取り組み、：第3報-介入の可能性と課題-	—	平成25年8月	日本災害看護学会第15回学術集会（札幌）	子ども自身が災害に備える力を高めるための『災害セルフケアパッケージ』の開発プロセスとして、肢体不自由用として開発したパッケージの重複障害の児童生徒への応用可能性と文字量が多い等の課題について報告した。 小室佳文, 加藤令子, 西田志穂, 沼口知恵子
47. 肢体不自由で重複障がいのある幼児自身が災害に備えることに関する保護者の認識：自然災害発生の危険性が高い地域を対象として	—	平成25年9月	第60回日本小児保健協会学術集会（東京）	肢体不自由で重複障害のある幼児を育てる家族を対象に、幼児自身が災害に備えることについて聞き取りし、報告した。 西田志穂, 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子
48. 重複障がいのある幼児期の肢体不自由児が災害に備えることに関する通園施設職員の認識	—	平成25年9月	第60回日本小児保健協会学術集会（東京）	肢体不自由で重複障害のある幼児を療育している施設職員を対象に、幼児自身が災害に備えることについて聞き取りし、報告した。 小室佳文, 加藤令子, 西田志穂, 沼口知恵子

<p>49. Evaluation of a Tool Developed for Improving the Self-Care Ability of Children With Physical Disabilities in Disaster Preparation. (災害に備える子どものセルフケア能力に対するシミュレーションパッケージに関する評価と子どもとセルフケア能力)</p>	-	平成25年10月	3rd World Academy of Nursing Science. (Seoul, South Korea)	<p>6人の特別支援学校の管理職教員を対象に、『シミュレーションパッケージ』のイメージトレーニングについて聞き取りを行い、その効果と課題について明らかにした。 Kato R, Komuro K, Nishida S, <u>Numaguchi C</u></p>
<p>50. 『災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-』を用いた介入効果と課題：発達レベルが異なる3事例の分析</p>	-	平成25年12月	第33回日本看護科学学会学術集会（大阪）	<p>『災害セルフケアパッケージ』を用いた3事例（小学校2年生、6年生、中学部1年生）について、学校と家庭での介入内容、子ども自身、保護者、教員が認識している子どもへの介入効果と課題を報告した。 加藤令子, 沼口知恵子, 小室佳文, 西田志穂</p>
<p>51. 『災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-』の開発</p>	-	平成25年12月	第33回日本看護科学学会学術集会（大阪）	<p>『災害セルフケアパッケージ』を用いた3事例（小学校2年生、6年生、中学部1年生）について、学校と家庭での介入内容、子ども自身、保護者、教員が認識している子どもへの介入効果と課題を報告した。 加藤令子, 沼口知恵子, 小室佳文, 西田志穂</p>
<p>52. 「災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-」における子どもへの支援内容-小学校高学年レベルの子どもの目標と教職員・保護者による支援-</p>	-	平成26年6月	第61回日本小児保健協会学術集会（福島）	<p>『災害セルフケアパッケージ』の小学校高学年レベルの子どもの行動目標と、教職員、保護者による支援内容を紹介した。 沼口知恵子, 加藤令子, 小室佳文, 西田志穂</p>
<p>53. 「災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-」における子どもへの支援内容-幼児期後期レベルの子どもの目標と教職員・保護者による支援-</p>	-	平成26年6月	第61回日本小児保健協会学術集会（福島）	<p>『災害セルフケアパッケージ』の幼児期後期レベルの子どもの行動目標と、教職員、保護者による支援内容を紹介した。 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子, 西田志穂</p>
<p>54. 「災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-」における子どもへの支援内容-小学校低学年レベルの子どもの目標と教職員・保護者による支援-</p>	-	平成26年6月	第61回日本小児保健協会学術集会（福島）	<p>『災害セルフケアパッケージ』の小学校低学年レベルの子どもの行動目標と、教職員、保護者による支援内容を紹介した。 小室佳文, 加藤令子, 沼口知恵子, 西田志穂</p>
<p>55. 「災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-」における子どもへの支援内容-中学部レベルの子どもの目標と教職員・保護者による支援-</p>	-	平成26年6月	第61回日本小児保健協会学術集会（福島）	<p>『災害セルフケアパッケージ』の中学部レベルの子どもの行動目標と、教職員、保護者による支援内容を紹介した。 西田志穂, 加藤令子, 沼口知恵子, 小室佳文</p>

56. 「災害セルフケアパッケージ - 肢体不自由児用 -」におけるセルフケアチェックリスト：一小学高学年レベル	—	平成26年7月	日本小児看護学会第24回学術集会（東京）	『災害セルフケアパッケージ』の小学校高学年レベルの子どもの行動目標の達成度を評価するチェックリストを紹介した。 沼口知恵子, 加藤令子, 小室佳文, 西田志穂
57. 「災害セルフケアパッケージ - 肢体不自由児用 -」におけるセルフケアチェックリスト：一幼児期後期レベル	—	平成26年7月	日本小児看護学会第24回学術集会（東京）	『災害セルフケアパッケージ』の幼児期後期レベルの子どもの行動目標の達成度を評価するチェックリストを紹介した。 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子, 西田志穂
58. 「災害セルフケアパッケージ - 肢体不自由児用 -」におけるセルフケアチェックリスト：一小学低学年レベル	—	平成26年7月	日本小児看護学会第24回学術集会（東京）	『災害セルフケアパッケージ』の小学校低学年レベルの子どもの行動目標の達成度を評価するチェックリストを紹介した。 小室佳文, 加藤令子, 沼口知恵子, 西田志穂
59. 「災害セルフケアパッケージ - 肢体不自由児用 -」におけるセルフケアチェックリスト：一中学部レベル	—	平成26年7月	日本小児看護学会第24回学術集会（東京）	『災害セルフケアパッケージ』の中学部レベルの子どもの行動目標の達成度を評価するチェックリストを紹介した。 西田志穂, 加藤令子, 沼口知恵子, 小室佳文
60. 小児看護のテキストにおける災害看護に関する記載内容の検討	—	平成26年8月	第16回日本災害看護学会学術集会（東京）	国内の小児看護学の教科書を対象に、災害看護に関する記載内容を抽出し、比較した。小児看護学教科書における災害看護の取り扱いは十分でなく、さらなる充実が必要であることが示唆された。 沼口知恵子, 加藤令子, 小室佳文, 西田志穂
61. Effectiveness of intervention based on “the Self-care Package for Children with Physical Disabilities against disaster” : A Case Study (セルフケアパッケージを用いた介入効果一ケーススタディー)	—	平成26年9月	Asia-Pacific Nursing Research Conference (Taipei)	『セルフケアパッケージ』を肢体不自由のある子どもに使用した効果について、ケーススタディで報告した。 Nishida S, Kato R, Komuro K, Numaguchi C
62. 在宅重症心身障害児の家族エンパワメント-父親が担う役割-	—	平成26年9月	第40回日本重症心身障害学会学術集会（京都）	在宅で生活する重症心身障害児の父親を対象に、役割について聞き取りを行った。父親は、家庭内の主に母親との役割調整と家庭外への働きかけの両方を行っていることが分かった。 藤岡寛, 涌水理恵, 佐藤奈保, 西垣佳織, 沼口知恵子, 岸野美由紀, 小沢浩, 岩崎信明
63. 「災害セルフケアパッケージ - 肢体不自由児用 -」活用可能性の検証：重度知的障がいの子どもの対象に。	—	平成26年12月	第34回日本看護科学学会学術集会（名古屋）	『災害セルフケアパッケージ - 肢体不自由児用』を重度知的障害の子どもの対象に使用した結果、子どもが声を出せるようになった等の効果がみられ、肢体不自由児用として開発されたパッケージの活用対象が今後広がる可能性が示唆された。 加藤令子, 小室佳文, 西田志穂, 沼口知恵子

64. 「災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-」による子どもへの介入効果-介入した教員の視点から-	-	平成26年12月	第34回日本看護科学学会学術集会 (名古屋)	『災害セルフケアパッケージ肢体不自由児用』を活用した教員への聞き取りから、教員は、児童生徒の能力に合わせて、様々な教材を開発し、効果的な授業を展開し、子どもの能力の拡大をはかっていた。 小室佳文, 加藤令子, 西田志穂, <u>沼口知恵子</u>
65. The Thoughts and Feelongs of Siblings Living with Children With Sever Moter and Intellectual Diaabilities. (重症心身障害児のきょうだいの考えや想い)	-	平成27年2月	Conference of East Asian Forum of Nursing Schilars. (Taipei)	在宅で生活する重症心身障害児のきょうだいを対象として面接調査をし、重症心身障害児への想い、両親への想い、自分への想い、社会資源への想いを明らかにした。きょうだいは、障がい児のきょうだいと共にある自分の人生を思い描いていたが、障がい児のきょうだいと関係の内自分自身の将来を描いているきょうだいもあり、将来的にきょうだいに負担がかかりすぎないように、社会資源の紹介等を行う必要がある。 <u>Numaguchi C</u> , Nishigaki K, Wakimizu R, Fujioka H, Sato N, Yamaguchi K.
66. The Family Empowerment of Mothers Rearing Children with Severe Motor and Intellectual Disabilities: Mothers' Perceptions of Services Needed to Maintain Daily Life and Empower the Family. (重症心身障害児を育てる家族のエンパワメント)	-	平成27年2月	Conference of East Asian Forum of Nursing Schilars. (Taipei)	重症心身障害児を在宅で育てる母親を対象に、サービスニーズや日々の生活を維持すること、家族をエンパワーすることについて聞き取り調査を行った。 Sato N, Nishigaki K, Wakimizu R, Fujioka H, <u>Numaguchi C</u> .
67. 『災害セルフケアパッケージ』を用いた災害への備え (話題提供) テーマセッション 医療を必要とする子ども自身が自然災害に備えるために看護師は何をすべきか	-	平成27年7月	第25回日本小児看護学会学術集会 (千葉)	災害に備えて、看護師の役割を再考するために、『災害セルフケアパッケージ』を開発した経緯と意図、その効果について話題提供を行った。 <u>沼口知恵子</u> (ファシリテータ; 加藤令子、小室佳文)
68. 在宅重症児家族の支援ニーズと専門職による実践の現状および必要度の評価～デルファイ法を用いて～	-	平成27年7月	第25回日本小児看護学会学術集会 (千葉)	34の重症心身障害児の家族を対象としたインタビュー調査から抽出した支援ニーズ41項目について、重症児看護に従事する看護職及び行政の福祉課職員を対象に、デルファイ調査を行った。と行政職が認識する実践の現状と必要度の認識が明らかとなった。 涌水理恵, 藤岡寛, <u>沼口知恵子</u> , 西垣佳織, 佐藤奈保, 山口慶子
69. The field survey of the families home-rearing children with severe motor and intellectual disabilities in Japan: focused on family member' s individual QOL (重症心身障害児を家庭で育てる家族の実態調査-家族メンバーのQOL-)	-	平成27年8月	12th International Family Nursing Conference (Denmark)	在宅で重症心身障害児を養育する家族メンバーの個々のQOLに焦点を当てた。結果、重症児の親の身体・精神QOLが低く、社会関係・環境QOLが高いという結果であった。また、重症児のきょうだいのQOLも先行研究と比してかなり高い結果であった。これは、きょうだいが家族内で何らかのy枠割を持ち、誇りを持って遂行できていることが理由として考えられた。 Wakimizu R, Sato N, Fujioka H, Nishigaki K, <u>Numaguchi C</u> , Yamaguchi K.

<p>70. The effectiveness and the problems of 'Image training' in preparing for natural disasters - Analysis of teachers' recognition at special support schools affected by the Great East Japan Earthquake (自然災害に備えるためのイメージトレーニングの効果—東日本大震災後の特別支援学校の教員の認識)</p>	—	平成27年10月	The 4th International Nursing Research Conference (Hannover)	<p>東日本大震災に遭遇した特別支援学校に勤務し、『セルフケアパッケージ』を使用していた学校管理職6名と教員6名の計12名にパッケージの効果と課題を尋ねた。震災時に素早い対応ができたことなどが課題として挙げられたが、学校外での災害発生時等、想定以外の状況についての備え等の課題も明らかとなった。 Kato R, Komuro K, <u>Numaguchi C</u>, Nishida S.</p>
<p>71. 特別支援学校に在籍する子どもに関する自然災害への備えの課題</p>	—	平成28年7月	日本小児看護学会第26回学術集会 (大分)	<p>我々が開発した2つの災害に備えるパッケージ (特別支援用災害シミュレーションパッケージ、災害セルフケアパッケージ-肢体不自由児用-) を使用した経験のある特別支援学校管理職の方を対象にしたグループインタビューの調査。学校内で2ツールは活用されていたが、今後は、下校時や入院中等学校外での活用等、ツール活用の場の拡大が課題である。 加藤令子、小室佳文、<u>沼口知恵子</u>、他3名</p>
<p>72. 障がいのある子どもと「災害への備え」に関する文献検討</p>	—	平成28年8月	日本災害看護学会第18回学術集会 (久留米)	<p>支援構築に向けた示唆を得ることを目的に、障害のある子どもと「災害への備え」について、国内外の災害対策、教育に関する文献検討を実施した。障がいをもつ子どもと「災害への備え」を検討した文献は国内外とも非常に少なく、ほとんどが周りの大人による備えや防災体制の整備などに焦点を当てており、子どもに視点をあてた取り組みが課題として抽出された。 佐藤奈保、加藤令子、小室佳文、<u>沼口知恵子</u>、他2名</p>
<p>73. Post Great East Japan Earthquake Recognized Roles for Natural Disasters Preparedness at Special Support School (東日本大震災後の特別支援学校における備えの認識と役割)</p>	—	平成28年9月	The 4th Academic conference of World Society of Disaster Nursing (Jakarta, Indonesia)	<p>開発した2つのパッケージについて、被害し日本大震災時に被害のあった学校での活用のための管理者の役割を明らかにした。管理者がキーパーソンとなり、学校組織の改革や教職員への働きかけが重要であることが示唆された。 Kato R, Komuro K, <u>Numaguchi C</u>, Nisida S, Sato N, Kai K.</p>
<p>74. 災害への備えツールの特別支援学校での導入-管理者の意思決定要因-</p>	—	平成28年11月	日本学校保健学会第63回学術集会 (つくば)	<p>自然災害から子どもたちのいのちを守るために開発した2つのパッケージを特別支援学校で導入・活用する際の管理者の意思決定要因について明らかにした。備えの促進には学校長の意思決定と学校長自身の災害への備えの意識が重要であることが示唆された。 <u>沼口知恵子</u>、加藤令子、小室佳文、西田志穂、佐藤奈保</p>

75. 障害のある子どもが災害に備えたセルフケア能力を高めるための支援—電子媒体を用いた災害教育の可能性—	—	平成28年12月	第36回日本看護科学学会学術集会（東京）	特別支援学校に在籍する子ども自身が災害に備える力をつけるために開発したパッケージ活用校において、電子媒体を用いた災害教育の可能性について面接調査した。教員は電子媒体を教育ツールとして用いることにメリットと有用性を認識していた。一方で児童生徒の障がいに関連した課題も示され、児童生徒の使用しやすさ、教職員の使用しやすさを考慮したアプリケーションの開発が必要である。 沼口知恵子、加藤令子、小室佳文、西田志穂、笹嶋宗彦、佐藤奈保、甲斐恭子
76. 肢体不自由のある子どもの災害への備え—成人期にある当事者の認識調査より—	—	平成29年6月	第64回日本小児保健協会学術集会（大阪）	先天性疾患により重度身体障害がある30台の成人女性を協力者とし、肢体不自由のある子ども自身が災害に備えるために必要な内容について聞き取りを実施した。結果として、災害に備えるためには、自己受容の促進と災害に備えた心掛が必要であることが明らかとなった。自己受容は難しい課題であるが、段階的に受容し、備えができるよう支援の必要性が示唆された。 沼口知恵子、加藤令子、小室佳文、勝田仁美、佐藤奈保、原朱美
77. 医療的ケアが必要な子どもが災害に備えるための支援構築に向けた現状と課題—重症心身障害児の親と教員を対象に—	—	平成29年8月	日本小児看護学会 第27回学術集会（京都）	医療的ケアを必要とする重症心身障害児が災害に備えるための支援構築に向けた現状と課題を明らかにするために、2人の重症児の保護者、教員を協力者として聞き取り調査を実施。生命に直結するケアであっても、十分な備えがなく、また特定の実施者が必要であり、課題が多かった。重症児が災害に向けたセルフケア能力を高めることは難しいという認識であったが、意思表示方法の開発や誰のケアでも受けられるなど、日々の取り組みが重要であることも示唆された。 勝田仁美、原朱美、加藤令子、沼口知恵子、佐藤奈保、小室佳文
78. 第1報：入院により情緒的混乱を示す子どもへの母親の認識と対応—母親の付き添い時に焦点を当てて—	—	平成29年8月	日本小児看護学会 第27回学術集会（京都）	子どもに付き添う母親が認識した、入院により子どもが示す情緒的混乱の実際とそれに対する母親の対処を明らかにするために、初回入院の子どもに付き添う母親6名に面接調査を実施。母親は、母親に密着するなどの子どもの示す混乱の様子を認識しており、子どもの思いを受け入れながら、対処していることが明らかとなった。看護師は、母親の付き添いがある場合でも、子どもの混乱を把握し、母親の状況を見て適切な支援をする必要があることが示唆された。 佐藤麗子、沼口知恵子、小野敏子
79. 第2報：入院により情緒的混乱を示す子どもへの看護師の認識と対応—母親の付き添い時に焦点を当てて—	—	平成29年8月	日本小児看護学会 第27回学術集会（京都）	母親の付き添う入院中の子どもが示す情緒的混乱への看護師の認識を明らかにするために、看護師への面接調査を実施した。看護師は、子どもの医療者に対する反応など、混乱の様子を認識していたが、母親の認識している混乱の様子とは内容が異なっていた。看護師は母親の付き添い中でも子どもの状況を把握すること、また母親が対応困難な場合には介入する必要性が示唆された。 佐藤麗子、沼口知恵子、小野敏子

80. 医療的ケアが必要な子どもが災害に備えるための支援構築に向けた現状と課題—医療的ケアを必要とする子どもの保護者を対象に—	-	平成29年8月	日本災害看護学会 第19回年次大会（鳥取）	医療的ケアを必要とする子どもが自然災害に備える支援構築に向け、子どもの保護者がとらえた現状と課題について、面接を実施した。現状として、意思疎通が困難で、抱っこが吸引が必要、子どもの力を高めることは必要だが困難であると感じていた。備えについては、ライフラインの確保やケアに必要な物品などの準備はしていたが、怖くて考えたくないという母親もいた。必要な支援については、移動手段の確保など具体的な内容が抽出された。 原朱美、加藤令子、勝田仁美、沼口知恵子、佐藤奈保、小室佳文
81. The Necessity for Increased Capability to Prepare for Natural Disasters by Students Requiring Medical Care - As recognised by teachers/staff at Special Support Schools (医療を必要とする児童生徒が自然災害に備える能力を高める必要性について、医療を必要とする学生 - 特別支援学校の教員/スタッフの認識 - )	-	平成29年10月	TNMC & WANS International Nursing Research Conference (Bangkok)	障害のある子どもたちが災害に備えるために必要と考える能力について、3県の特別支援学校の教員6人に面接調査を実施した。面接の結果、状況を受け入れる力、いつもと違う状況においても身体的なケアを受け入れることができること、身体的な緊張を減らすことができるなど、状況の悪化を防ぐために必要であることが示された。障害のある子どもたちは、定期的に自然災害のための能力を高める必要があり、様々な人たちとの訓練や接触が必要であることが示唆された。 Reiko Kato, Hitomi Katsuda, <u>Chieko Numaguchi</u> , Akemi Hara, Naho Sato Kafumi Komuro
82. 自閉症スペクトラム障害を有する中学生の友達関係における困りごとと対処—第1報 子どもへの面接調査—	-	平成29年11月	日本学校保健学会 第64回学術大会（仙台）	自閉症スペクトラム障害を有する中学生を対象に、友人関係における困りごとと対処を面接調査した。分析の結果、協力者たちは、相手に伝えられない、相手の気持ちがわからない、集団の中での孤立、約束を忘れるなどの困りごとを持っており、これらに対し、自分から謝る、相手から距離をとる、相手の立場で考える、他者の力を借りるなどの対処をしていることが示された。協力者たちは、思春期特有の悩みと、疾患からくる特徴に関連する困りごとを認識していた。看護師は彼らが自分の行動を客観的に理解できるよう支援し、子ども自身の力を引き出すことが重要であると考えられた。 海野潔美、沼口知恵子
83. 自閉症スペクトラム障害を有する中学生の友達関係における困りごとと対処—第2報 母親への面接調査—	-	平成29年11月	日本学校保健学会 第64回学術大会（仙台）	自閉症スペクトラム障害を有する中学生の母親への面接調査を通して、子どもの友人関係における困りごとに対する認識と母親の対処を明らかにした。分析の結果、子どもの困りごととして、友達とのかかわり方が難しい、自分の癖、親しい友達が少ないなどが抽出された。母親の対応としては、うまくやるための工夫を伝える、子どもの気持ちを安心させるなどが抽出された。看護師は、母親が疾患の特性を正しく理解できるよう支援し、子どもの自己理解や対処能力の向上につながる支援を母親ができるよう助言することが重要であることが示唆された。 海野潔美、沼口知恵子

84. 視覚障害のある子どもと「災害の備え」 —生徒・親・教員へのインタビュー調査より—	-	平成29年11月	日本学校保健学会 第64回学術大会（仙台）	視覚障害のある子どもが自然災害に備えるために必要な力について、盲学校に通う中高生とその親、教員に面接を実施した。生徒自身は、発災時に一人で逃げられるようにすることが大切と認識していた。親は災害時に子どもが自ら情報を得、行動できるとよいと考えていた。教員は生徒が災害への恐怖感を持つことが重要であり、教育の中でその認識を促すことが可能と述べた。開発中のツールの、視覚障害を持つ子どもの備えへの活用可能性が示唆された。 佐藤奈保、加藤令子、沼口知恵子、原朱美、小室佳文、勝田仁美
85. 聴覚障害のある中学生の災害への備えに対する生徒・母親・教員の認識—2事例へのインタビュー調査より—	-	平成29年11月	日本学校保健学会 第64回学術大会（仙台）	聴覚障害の子どもが自然災害に備えるために必要な力について、聾学校に通う2名の中学生、親、教員に面接調査を実施した。事例Aは災害の種類等の知識はあるが、知らない人に聞くのが苦手であった。母親と教員は、補聴器の電池切れに備える必要性を認識していた。事例Bは、人工内耳を持ち、知的障害を有する。本人は身を守る方法などの知識を持っていた。母親と教員は、非常時に自分が行うことを判断する力などが必要であると認識していた。災害時は、学校外で周囲の人とコミュニケーションをとる力と手段が必要であり、その力を備える方法を検討する必要がある。 小室佳文、加藤令子、原朱美、沼口知恵子、佐藤奈保、勝田仁美
86. 子ども自身が災害に備える力を高めることへの看護師の認識と取り組み	-	平成29年12月	第37回日本看護科学学会学術集会（仙台）	医療を必要とする子どもが災害時に自分たちの健康維持・管理ができるよう備える力を高めることについて小児病棟・外来看護師の認識と取り組みを明らかにした。協力者は10名の看護師であった。子ども自身が災害に備えることは9名が必要と考えており、自分の疾患の理解、自分の体調がわかる、生活を整える、自分の体調を人に伝える、周囲に助けを求める等6つの力が必要であると考えていた。現在の取り組みとしては、備蓄の必要性などの説明や内服の自己管理の促しであったが、家族への説明が中心であると認識していた。今後の介入として、発達に合わせたかかわりなどが述べられ、また介入のための看護師用のガイドの必要性も示唆された。 沼口知恵子、加藤令子、小室佳文、原朱美
87. 医療を必要とする子どもの災害への備え - 健康の維持管理に焦点を当てて - (話題提供)	-	平成30年7月	日本小児看護学会 第28回学術集会（名古屋）	医療を必要とする子どもと保護者、医療を必要とする子どもを看護する看護師への調査を実施し、医療を必要とする子どもたちが災害時に体調の維持管理をするために必要な力と、それを高めるための看護師の支援内容を明らかにした。その結果について概説し、結果に基づいて開発中のツールについて紹介した。 沼口知恵子 テーマセッション 自然災害から子どもの安全や命を守る—医療・教育・福祉の連携の重要性—（ファシリテータ；加藤令子、佐藤奈保）

86. 災害時に子どもの生命と生活を守るための活動の現状と課題—国内における子どもの災害への備えに関する文献検討—	-	平成30年8月	日本災害看護学会第20回年次大会（神戸）	国内における子どもの災害への備えの活動内容と課題に関する研究動向を明らかにするために文献検討を実施した。54件の文献を分析した結果、活動内容、不安要因、災害時を想定した課題に関する内容が抽出され、発災以降の支援内容と比較して、備えに関する支援内容とアウトカム指標の検討の必要性が示唆された。 原朱美、加藤令子、小室佳文、沼口知恵子
87. Nursing support guide forenhancingdisaster preparedness abilities of children in need of health care (医療を必要とするこどもの災害に対する力を高めるための看護支援ガイド)		平成30年8月	World Society of Disaster Nursing Research Conference (Bremen, Germany)	災害時に子ども自身が自分の健康の維持管理をすることができる力を高めるための看護支援ツールの開発を最終目的とし、医療を必要としているこども、その親、看護師に災害時にどのような力が必要か、そのためにどんな支援が必要と考えるかを聞き取りし、8つの必要な力を抽出し、その力を高めるための看護支援を検討しツールを作成した。 C. Numaguchi, R. Kato, K. Komuro, A. Hara
88. 障害のある子どもが自然災害に備える力を高めるための防災アプリケーション開発		平成30年12月	学校保健学会（大分）	障がいのある子どもが自然災害に備える力を高めるためのツールの1つとして、子どもが能動的に学習し、災害に備えるための防災アプリを開発した。報告では開発までのプロセスとアプリのシナリオ構成、実際に完成したアプリの特徴について発表した。 沼口知恵子、加藤令子、小室佳文、佐藤奈保、原朱美、勝田仁美
89. Nursing Support Guide for Enhancing Disaster Preparedness Abilities of Children in Need of Health Care :A revision based on nurses' opinions		令和2年2月	The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (Osaka)	開発したツールの臨床現場での使用可能性について聞き取り調査を実施し、その結果に基づいて修正したツールを紹介した。 沼口知恵子、加藤令子、小室佳文、原朱美
90. テーマセッション『慢性疾患の子どもが災害に備える力を高めるための看護支援ツールの活用』		令和2年9月	第29回日本小児看護学会学術集会（WEB）	開発したツールの紹介及び、活用例の実際を紹介し、そのツールの効果について議論した。 沼口知恵子、加藤令子、小室佳文、原朱美、木村裕美子、平賀紀子
91. The implementation which is a healthy examination 5 years old and the problem at each Japanese city		令和3年11月	6th Global Network of Public Health Nursing (Osaka)	全国の自治体に5歳児健診の実施と課題について調査し、全国で1割の自治体でのみ実施され、発達の判断は保健師、臨床心理士、小児科医によって実施されていた。実施については、マンパワーの不足が課題として挙げられた。 山口忍、綾部明恵、斎藤恵理、中島敏子、沼口知恵子他1名
92. 特別支援学校に通う知的障がいのある子どもの生活と発達に関する見えづらさ		令和4年10月	日本学校保健学会第68回学術集会（WEB）	特別支援学校の教員に対し、知的障害のある子どもの見えづらさについて聞き取り調査を実施し、17名の教員より、見えづらさが起こる状況、生活と発達に与える影響について明らかにした。 沼口知恵子、小室嘉文、西川菜央、加藤令子